

2022年度上期 北海道・東北ブロック会議報告

- (1) 6月9日（木）14：00～にオンライン開催され、参加産地は21産地から39名、生消協生産者幹事、ブロック役員12名、消費者幹事5名、パルシステム関係者11名、合計66名の参加でした。
- (2) 能登谷副ブロック長（常盤養鶏）の進行により開始され、大津代表幹事（無茶々園）の開会挨拶の後、小川生産者運営委員長（JAつくば市谷田部）より2022年度生消協活動方針の説明がされました。
- (3) 次に、パルシステム連合会洪澤専務理事、産直事業本部島田本部長より2021年度実績・2022年度方針と新年度からの受注、供給状況の報告となりました。
- (4) 続いて産地報告「緑の食料システム戦略に先行した地域での取り組み」として、菅原代表（庄内産直ネットワーク）より鴨除草と有機圃場圃地化による鴨街道の取り組み、小野寺副代表（庄内協同ファーム）より有機栽培推進に向けた新型水田除草機ウィードマンによる省力化の報告がされました。
- (5) 報告後、高橋ブロック長（庄内協同ファーム）より趣旨説明が行われ、「各産地の省力化に向けた明るい話題」をテーマに生消協役員の進行により、グループディスカッションが行われました。
- (6) 各グループ代表者の発表では、「スマート化も最後は人の手が欠かせない、人の教育と並行してスマート化を進めたい」「慣行栽培生産者の関心が変わってきている」「ウクライナ問題に発した食糧危機に向け消費者の動向が肝心」「地域として農福連携が進んでいる」「導入による省力化は他の作業に取り組む余裕が生まれることや燃料代節約などに役立っている」などの事例報告がされました。
- (7) 消費者幹事の戸谷幹事（パルシステム東京）より、「産地を知ることは消費者として食の安全安心はもとより自身の食卓とつながる貴重な機会。生産者とのつながりを持つ感覚はパルシステムならでは。お互いに思いやれる関係がここにはある。消費者幹事としても皆様の取り組みを広めていきたい」と感想とまとめが行われ、高橋ブロック長による閉会挨拶の中では、大須賀生産者幹事（花兄園）による次年度開催宣言がされ閉会となりました。

